

中之島図書館の有効活用について(案) 【報告要旨】

大阪府立中之島図書館のあり方TF

《現況・他の都道府県立図書館と比較した特徴点等》

- 面積規模(6,897㎡)・来館者数(31万人/年)は平均並み。
- 蔵書冊数(56万冊)は、やや少なめ。
- 古典籍20万冊は、国会図書館、都立中央に次ぐ規模。
- 来館者に職業人が多い(62%)、仕事目的での来館者が多い(23%)。
- 本館建物は、現役の公共図書館では国内最古。唯一の国指定重要文化財。
- 大阪都心部での地域図書館的な機能も担う。

《評価》

- 来館者の96%が満足(24年度来館者アンケート)。
- 古典籍は、貴重なものも多く、TV、出版物に頻繁に利用されており、他館の展示会等にも貸出。
- ビジネス支援サービスに対するモニターの声
 - ▽ ビジネスチャンスの拡大が期待できる。
 - ▽ 大企業の人々が求める深い資料がない。
 - ▽ 折角のサービスが十分周知されていない。

《課題》

- 重文建物の管理が行き届かず、設備も老朽化。
- EV、食堂等が無く、アメニティに欠ける。
- 古典籍の電子目録・デジタル化が遅れている。
- ビジネス支援サービスの周知が不十分。
- 旧態然とした入退館システム。
- 職員の意識が時代の変化に追い付いていない。

《外部有識者の意見》

- 玄関・諸室が狭小、EV未整備等、集客施設に不向き。
- 重文建物の有効活用を。正面玄関からの入館は必須。
- 今の入退館管理は前時代の遺物。意識の改革も必要。
- スモールビジネス支援などへの特化を検討すべき。
- これからは、フリーランスの人々をビジネス支援の対象に。
- 展示・講座など毎日何か面白いことをやっていることが必要。(別館等)

《中之島図書館の方向性：仮説とその検討結果》

【仮説1】美術館・博物館等集客施設への転用。

⇒ 重要文化財故の困難性、改修に莫大な費用・時間が必要。現実的に困難。

【仮説2】図書館を継続する場合。

① 古典籍を展示する図書館ミュージアムに特化。

⇒ 入館者の激減(1/6程度)が予想され、賑わいを期しがたい。

② ビジネス支援に特化する。

⇒ 建物の魅力とマッチする事業は困難。古典籍を散逸させる懸念あり。

③ ビジネス支援サービスを中之島図書館で行う必要はあるのか。

⇒ 「うめきた」「駅前4ビル」等では現在の図書と電子資料を共に提供する形態でのサービスは困難。図書館の分散配置によるコスト増の懸念も。

④ 一般の地域図書館化する。

⇒ 基礎自治体が運営すべき図書館機能であり、府が担うべきではない。

⑤ 図書の貸出サービスを止める(※東京都立は唯一貸出をしていない)。

⇒ 府内の図書館環境は東京都に比し脆弱。現時点での見直しは時期尚早。

⑥ 図書の貸出窓口をODONAや市役所1階など便利な場所に移す。

⇒ 図書館にも窓口を設けざるを得ず、新たな窓口設置で費用が増嵩。

【総括】

- 他用途への転用は膨大な経費と時間を要し、現実的ではない。
- サービス内容の特定事業への特化は、図書館として十分なパフォーマンスが発揮できず、削減効果もない。

《TFとしての提案》

建物、蔵書、培ってきたノウハウを最大限活用、中央公会堂等との連携により、中之島にふさわしい文化的香りのする事業を組み込んでリニューアル。

⇒大阪中之島「文化」図書館－プライド・オブ・大阪、先人の偉業に親しむ

- 街の中の文化ステーション(何でもありのワンダーランド):圧倒的な情報の蓄積に直接触れ、大阪アイデンティティを確認
- 地域直結図書館サービスの継続・拡充:府立・市立中央のサテライト等
- 快適性の確保・外観の美化:正面玄関からのフリー入退館、外壁洗浄等

＜所要経費＞約4億円(今後要精査)

＜スケジュール＞ 27年度オープン

重文耐震補強工事完了(26年末予定)後にリニューアル工事に着手。

※非重文部分の耐震補強工事:26年度基本設計、28年度以降着工